明治大学商学部

特別テーマ実践科目2023年度成果報告書

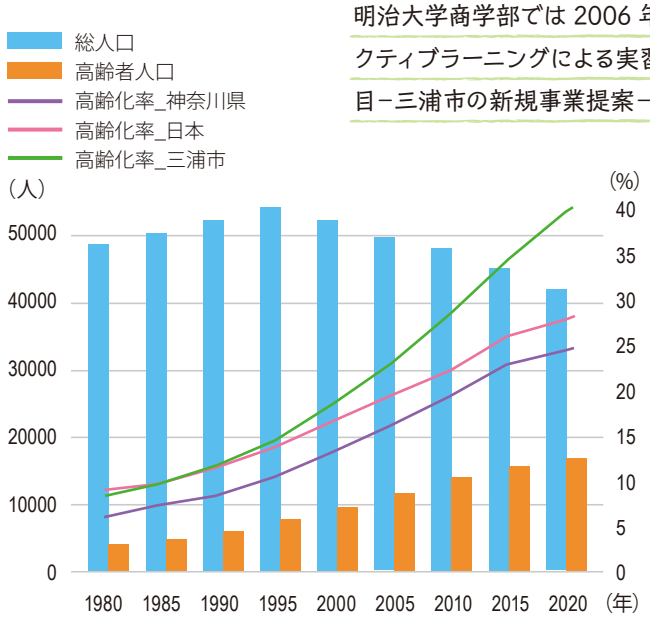
地域のチカラ

表紙・挿絵：太田芽衣（商学部4回生）

明治大学「道の駅」研究所

1 特別テーマ実践科目
「三浦市における新規事業提案」の成果報告

明治大学商学部では 2006 年度より、三浦市との連携のもと「特別テーマ実践科目」において、アクティブラーニングによる実習・実践授業に取り組んできました。2023 年度「特別テーマ実践科目－三浦市の新規事業提案－」では、計４回の調査実習（春学期と秋学期各２回）を実施しました。



①神奈川県三浦市の現状

神奈川県三浦市は、三浦半島の先端に位置している人口約40,000人の市。都心からの交通アクセスが便利であるにも関わらず、市内の人口は54,339人（1994年）をピークとして減少し続けています（図1左軸）。同時に高齢化が進行し、2020年の高齢化率は40.8%で、神奈川県の25.0%、全国の28.6%を大きく上回っています（図1右軸）。

図1 三浦市人口と三浦、神奈川、日本の高齢化率推移
資料:「人口・世帯数に関する統計」総務省統計局

②現地調査結果

春学期（基礎編）

春学期の調査は、5月28日と6月11日の2回にわたって実施しました。第1回調査（5月28日）では、現地の歴史的伝統祭事である「道寸祭」に「諸役」として参加させていただき、伝統ある地元の祭事を体験して、現地の方々との交流を深めました。

第2回調査（6月11日）では三崎港商店街を訪れ、「海南神社」、「Caba Coffee」、「丸一水産」、「カフェ３２０４」において、三浦市の抱える課題について聞き取り調査を行ないました。一連の現地調査、研究会、講演会を通して、現在、三浦市が直面している様々な課題について学生同士が話し合い、地域活性化のための新しいアイデアを出し合い、報告書にまとめました。そして、7月19日に駿河台キャンパスにおいて、研究報告会を開催しました。

「カフェ3204」での調査

「丸一水産」での昼食

「道寸祭」諸役として参加した様子

神奈川県における
三浦市の位置

一方、三浦市はマグロやサバ等の海産物で知られ、三浦海岸、油壺湾などでは海水浴やマリンスポーツも盛んです。さらに、仏閣寺院など文化的・歴史的な観光資源が豊富で、観光客を誘引する条件が整っています。観光産業データによると、2012年～2018年は、観光客数、観光消費額が堅調に推移しています（図2）。

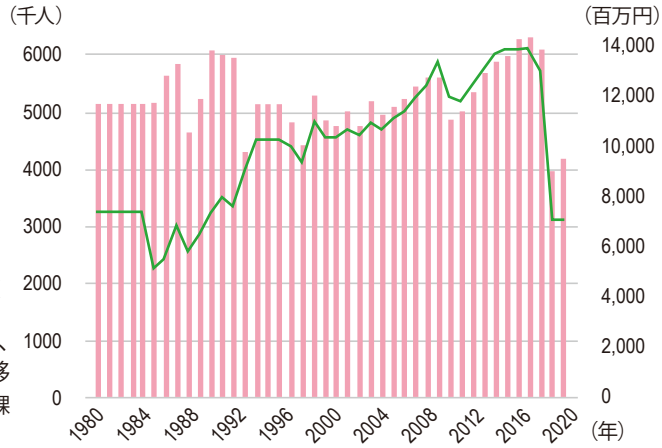


図2 三浦市観光客入込客数、観光消費額の推移
資料：三浦市経済部おもてなし課

「くろぜむ農園」での収穫体験の様子

秋学期（応用編）

神奈川県では、6次産業化について、農林水産業者の経営安定や所得向上および地域の活性化を図るため、商品の企画、開発等に必要な知識や技術を備えた人材の育成を推進し、多様な事業者との地域ぐるみの取り組みを行っています。基本的には経営規模によらず大消費地が近いことを生かした商品開発を検討しています。現地調査は、10月29日と11月19日の2回にわたって実施しました。

くろぜむ農園

第1回調査（10月29日）では、「くろぜむ農園」を訪れ、農産物の栽培、ドライ野菜商品への加工、販売という6次産業の取り組みに関する調査を実施しました。くろぜむ農園は、約千年前から先祖代々農業を営んでいます。

「自分たちが食べて美味しいと思える作物を栽培し、心身共に健康を提供すること」を経営理念とし、完全露地栽培により、青首大根、三浦大根、キャベツ、ブロッコリー、ネットメロン、すいか、かぼちゃ、王様トマトを中心に年間約40品目程度栽培しています。温暖な三浦の地の利を生かした、ビニールトンネルやビニールマルチを使わない完全露地の密着栽培を行っています。

代表の山田靖子氏は、手軽に持ち帰れるお土産にしたいという思いから「海風のドライベジ」を考案し、2022年に神奈川県で女性が開発に貢献した商品を募集・認定し、PRする「神奈川なでしこブランド」に認定されています。農園では栽培した野菜を自ら加工、商品化し、さらに販売まで行なう6次産業化に取り組んでいます。調査では、さつまいもの収穫をお手伝いし、農園では、山田様ご夫妻のお話のお聞きしながら、ドライ野菜を使ったお料理を試食しました。

研究会の様子

②現地調査結果

加工場と店舗内の様子

三浦パン屋　充麦

第2回調査(11月19日)では、「三浦パン屋 充麦」を訪れました。「充麦」は自家農園で小麦を栽培し(第1次)、収穫された小麦から小麦粉を製粉して、自社工場でパンの製造(第2次)を行ない、加工所の隣にある店舗で販売(第3次)を行なっています。経営者の蔭山充洋氏は、横須賀市でクラブDJとしてのキャリアの後で、ヨーロッパを歴訪し、フランスで出会ったパンに魅せられて、帰国後にパンを扱うホテルのシェフになったという異色の経歴を持った方です。売れ残ったバゲットを使ったビールを製造しており、フードロス問題の解決にも取り組んでいます。

お店には、出来たてパン以外にも三浦市や神奈川県内の農家や店舗と連携した商品が並んでいます。蔭山氏は、地元のものを使うことが「自然」であるとし、創作パンに使う野菜や卵、はちみつ等には全て地元産を使用しています。蔭山氏は終始自分がやりたいことをとことんやっていると語っており、地域内のコミュニティを使ってもっと三浦市を盛り上げたいと熱く語ってくださいました。

影山氏(左端)と調査実習メンバー3名

2 特別テーマ実践科目

「南房総市の地域活性化の取り組み」の成果報告

「特別テーマ実践科目 - 南房総市の地域活性化の取り組み -」2023 年度秋学期では、「明治大学「道の駅」研究所」との連携のもと、南房総市での調査実習を実施しました。調査は、同市の地域活性化の拠点とされる道の駅「とみうら枇杷倶楽部」（第１回）と「冨楽里とみやま」（第２回）を訪れました。

図1 千葉県における南房総市の位置

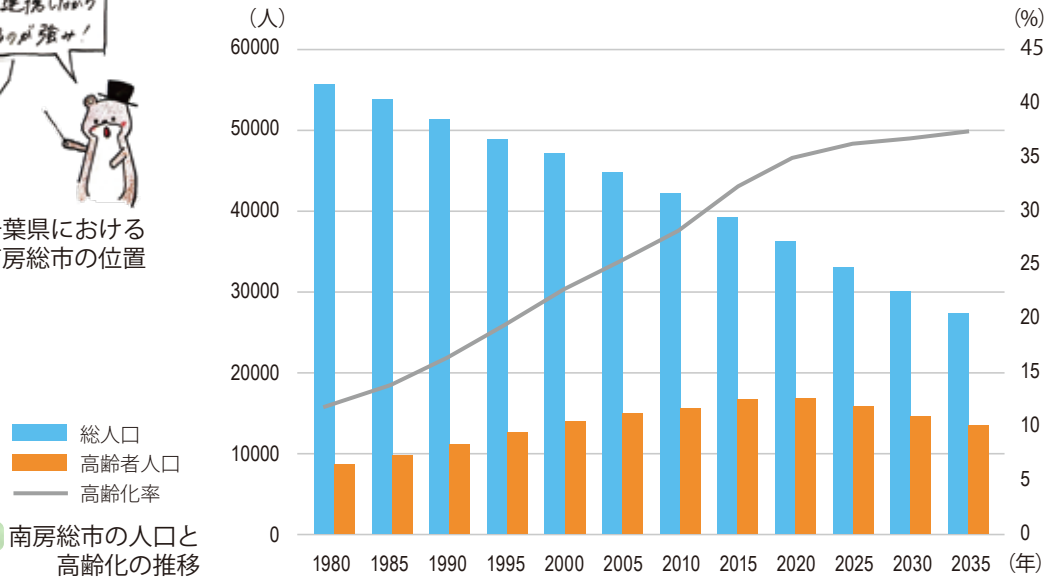


図2 南房総市の人口と高齢化の推移

①千葉県南房総市の現状

千葉県南房総市は、千葉県の南部にあり、関東地方の最南端に位置し、海岸部は南房総国定公園に指定されています。千葉市や銚子市、木更津市などと隣接しており、また、東京都からも「東京湾アクアライン」を経由することで、アクセスが便利な地域です。2006年に７つの旧町村の合併により発足しました（図1）。

南房総市では急激に人口の高齢化が進んでおり、2020年の高齢化率は47.2%で全国平均の28%を大きく上回っています。また、15歳未満の人口割合は10.8%と低く、少子高齢化が深刻な問題となっています。2045（令和 27）年には男性では70～74歳、女性では90歳以上の人口が最も多くなるなど、65歳以上人口が著しく増加しより高齢化が進むと推計されています（図2）。市の基幹産業である農業についても農家数が減少傾向にあり、新たな地域活性化策が期待されています。

地域の活性化策として、市内に８つの道の駅①「とみうら枇杷倶楽部」②「富楽里とみやま」③「三芳村鄙の里」④「ローズマリー公園」⑤「ちくら潮風王国」⑥「和田浦ＷＡ・Ｏ！」⑦「白浜野島崎」⑧「おおつの里花倶楽部」を拠点とした市内の農業・観光の振興を行なっています。これらの８駅のうち「白浜野島崎」を除く7駅は、「株式会社ちば南房総」によって管理運営されていることもあり、市内の８駅が相互に連携し、常に情報交換を行なうことで、強固なネットワークで結ばれています。そして２０２０年に、これらの取り組みが認められ、重点「道の駅」に選定されました。「特別テーマ実践科目南房総市の地域活性化の取り組みＤ（秋学期）」において、８駅のうち、「とみうら枇杷倶楽部」と「富楽里とみやま」を訪れ、現地の取り組みについて調査を実施しました。

道の駅「富楽里とみやま」正面玄関

②現地調査結果

道の駅「とみうら枇杷倶楽部」

第1回調査(10月1日)では、道の駅「とみうら枇杷倶楽部」を訪れ、(株)ちば南房総相談役の加藤文男氏にお話を伺いました。「とみうら枇杷倶楽部」内には、市役所の観光プロモーション課の職員が常駐しており、常に情報共有・連携が図られています。駅では、①エコミュージアム(分散配置事業の統合運営理論)の手法による町全域の活性化、②産業振興施設(枇杷倶楽部・花倶楽部等)の自活と、地域産業振興への貢献、③植物の成育段階の視覚化による集客拠点の整備、④「文化」を打ち出した差別化、⑤町民の憩いの場と学習・文化・情報の場整備という5つの方針で市の活性化に取り組んでいます。

具体的には、次の3つの取り組みを行っています。

キラーコンテンツ「びわ」を使ったPB商品

取り組み①

地域特産品の「房州びわ」を使ったジュース、ゼリーなどのPB(プライベートブランド)商品の展開です。「房州びわ」を核(キラーコンテンツ)に多様な商品を開発して販売しています。レストランで大人気の「枇杷カレー」には、枇杷農家から仕入れた規格外の枇杷を加工したピューレが使われています。「房州びわ」として企画に合格した商品は生産量のわずか約3割であることから、このような規格外商品を有効利用する方法は、SDGsの観点からも非常に重要です。

枇杷カレー

取り組み②

地域の団体・企業をネットワーク化することにより、「収穫体験」「飲食」「宿泊」「地域観光などの旅行企画」を、「とみうら枇杷倶楽部」が旅行代理店となり一元的に受注することで、観光産業の維持・拡大、南房総市全体のイメージや認知度の向上に成功しました。また、1997年のアクアラインの開通による個人客の利用増加を受けて、JR東日本との連携により、「ビワ狩り体験」を軸とした着地・個人型旅行商品の共同開発に取り組んできました

TOPIC

「地域活性化システム論」における「地方創生アイデアコンテスト」とゲストスピーカによる講演

「地域活性化システム論」ではクラス内で「地方創生アイデアコンテスト」を1月22日に開催しました。13のグループに分かれて、各班で考えた地方創生のアイデアに関してプレゼンテーションをしていただきました。各報告は、どれも真剣に考えられた素晴らしいアイデアばかりで、コンテストはとても盛り上がりました。

出席者の挙手による投票により、第1位に選ばれたのは、「商店街まちづくり班」の石崎草太さん、落合康平さん、久保はるかさん、細川健人さん、山田航太さん(いずれも3回生)による報告で、最優秀賞が授与されました。同班は、チームリーダーの久保さんを中心として、「商店街の空き店舗を活用した地域活性化」というテーマで「シェアオフィスカフェや地域支援子育てスペースを空き店舗に設けることで、業種間の交流・世代間の交流を生み出す」というアイデアを発表されました。

道の駅「富楽里とみやま」での
調査実習の様子

道の駅「富楽里とみやま」

第2回調査（12月3日）では、道の駅「富楽里とみやま」を訪れ、支配人の池田文子様にお話を伺いました。同駅は、2023年7月にリニューアルされ、1階は地域でとれた農水産物の直売、特産品販売センター、2階はフードコートコーナーで地域食材を使った飲食店の営業と地域交流・ふるさと情報展示コーナーが設置されており、リニューアルにより綺麗になったことで、多くの来場者で賑わっていました。同駅は、新鮮な農水産物の品揃えが豊富なことで有名で、いつも木更津・市原を含めた南房総地域からの買い物客で賑わっています。また、観光客に対しては、みかん、竹の子、びわ狩りなどの収穫体験が人気です。

レジの自動化によりレジ担当を12人から6人に減らすことで、お客様に対する接し方に余裕が生まれたと言います。また「富楽里とみやま」では9割が女性であることから、結婚、出産などのライフスタイルに応じて、パート、正社員などの働き方を選べる制度を採用しており、明るい雰囲気につながっていると言います。

農産物直売所売場

調査実習の参加者（中央が池田支配人）

さらに本講義では、明治大学「道の駅」研究所と連携し、客員研究員の先生方による次のような特別講義を2回実施しました。第1回目10月16日には、八千代エンジニヤリング（株）専務執行役員の吉兼秀典氏、同事業統括本部の竹田恵利加氏と小川耀司氏に「日本のインフラの果たしてきた役割とこれからの課題」及び「道の駅におけるPPP/PFI事業について」という2つのテーマで、第2回目の1月15日には、汎太平洋東南アジア婦人協会副会長の鹿野和子氏により「〈道の駅〉と農村女性のエンパワメント」というテーマで、それぞれご講演をしていただきました。

また、現場での地域活性化の現状に触れるために外部専門家による特別講義も2回実施しました。第1回目の11月20日には、（株）ちば南房総相談役の加藤文男氏に「道の駅と地域活性化」というテーマで、そして12月11日には、ラジオNHKジャーナルの山崎淑行キャスターと堤千春ディレクターに「今こそ、地方創生街づくりを記者はどう見ているか」というテーマで、それぞれご講演をしていただきました。

地域活性化政策の最前線で活躍しておられる計4名の諸先生方の講義に学生は真剣な表情で聞き入り、提出された授業の感想レポートは、いずれも彼らの真剣さが伺えるものばかりで、受け取られたゲストスピーカーの先生方がとても驚かれておられました。

編集後記

本報告書は、2023 年度 明治大学商学部「特別テーマ実践科目－三浦市における新規事業提案 C 基礎編（春学期）・D 応用編（秋学期）－」および「特別テーマ実践科目－南房総市の地域活性化の取り組み D（秋学期）－」における、学生によるフィールドワーク実習の成果、さらに「地域活性化システム論」における 1 年間の活動成果を取りまとめたものです。

フィールドワークの実施にあたり、神奈川県三浦市の調査では、三浦市経済部観光プロモーション課 課長の渡辺聡子氏、そして前任の柴田和義氏には、多大なるご協力をいただきました。さらに、調査対象とさせていただきました「くろぜむ農園」の山田靖子代表とご家族の方々、そして「三浦パン屋 充麦」の蔭山光洋代表には、大変ご親切に調査にご協力いただきました。あらためまして感謝を申し上げます。

また、千葉県南房総市の調査では、株式会社ちば南房総 相談役の加藤文男氏、ならびに道の駅「富楽里とみやま」支配人 池田文子氏には、貴重なお時間を割いてインタビューにご回答いただき大変お世話になりました。心からお礼を申し上げます。なお、本報告書出版は、明治大学地域連携活動助成金の助成を受けました。この場を借りてお礼を申し上げます。

明治大学商学部特任准教授　博士（経済学）
松尾 隆策

フィールドワークへの参加と成果報告の執筆

今井悠叶（商学部 3 回生）、太田芽衣（商学部 4 回生）、小澤怜以（商学部 3 回生）、白髭大希（商学部 4 回生）、多田彩乃（商学部 3 回生）、津野葵泉（商学部 3 回生）、長瀬真理子（東洋大学大学院）、原雅也（商学部 3 回生）、秀平幹太（商学部 4 回生）、山本龍輝（商学部 4 回生）、山中智仁（商学部 4 回生）、渡邊涼香（商学部 4 回生）（50 音順）

●調査実習指導：松尾隆策（商学部）

明治大学「道の駅」研究所とは

人口減少、少子高齢化、そして地域経済の衰退など、地域が直面する課題に対する処方箋の確立を目指すため、2023 年 7 月に明治大学に設立された研究ユニットです。「道の駅」の創設や研究に従事してきた大学、民間の調査研究機関、コンサルティング企業、国際機関の OB などがメンバーとなり、様々な角度から学際的な研究を展開しています。国内外地域でのアンケート調査、ヒアリング調査などを行ない、研究成果をシンポジウム、論文・著書、メディアへの発信などを通じて積極的に社会に還元しています。

「地域のチカラ」創刊号

編集・執筆代表：松尾隆策（明治大学商学部 特任准教授）
表紙・挿絵：太田芽依（商学部４回生）
発行：明治大学「道の駅」研究所
〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1 駿河台キャンパス研究棟（14 号館）B312 号室
Tel：03-3296-3112
発行日：2024 年 3 月 1 日
印刷・デザイン：共信商事株式会社
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 3-5-15 荒井ビル 5F